2025年11月18日（＊本資料は講義メモのため引用・転載不可）

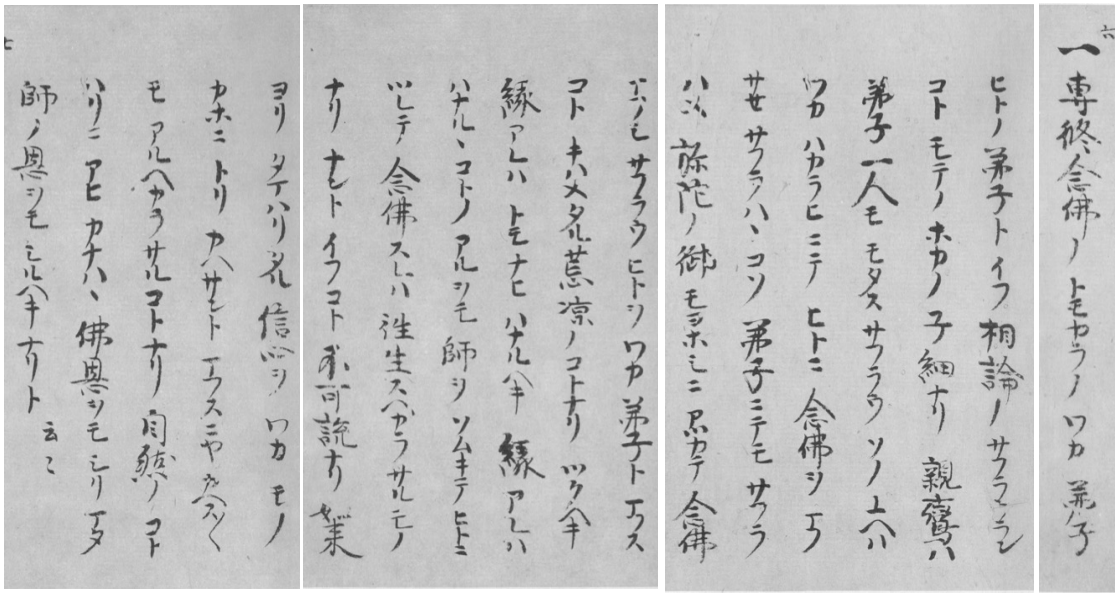
副所長定例講座

「『歎異抄』思想の解明」第Ⅲ期・第11回（通算第31回）

第六章――親鸞は弟子一人ももたず（3）

「ただ念仏」と師弟関係

加来 雄之



蓮如書写本	【安良岡『歎異抄全講読』現代語訳】改訂
六一 ① 専修念佛のともがらの、わが弟子ひとの弟子といふ相論のさふらうらんこと、もてのほかの子細なり。 ② 親鸞は弟子一人ももたずさふらう。 ③ そのゆへは、わがはからひにて、ひとに念佛をまふさせさふらはゞこそ、弟子にてもさふらはめ、*弥陀の御もよほしにあづかて念佛まふしさふらうひとを、わが弟子とまふすこと、きはめたる荒凉のことなり。 ④ つくべき縁あればともなひ、はなるべき縁あればはなるゝことのあるをも、師をそむきてひとにつれ	一（第六章） ① 専修念仏の仲間の人々が、「〔これは〕自分の弟子だ、〔あれは〕他人の弟子だ」という口争いがあるようでございますことは、とんでもない事態である。 ② 〔この〕親鸞は、弟子を一人も持たないのです。 ③ そのわけは、自分の取りはからいで、他人に念仏を申させますならば、それこそ弟子でもございましょうが、〔阿〕弥陀〔仏〕の御催しに預かって念仏を申します人を、自分の弟子と申すことは、甚だ尊大なものの言い方である。 ④ 〔自分に〕従うはずの縁があれば一緒になり、〔自分から〕離れ去るはずの縁があれば離れ去ってしまうことがあるのに、〔自分という〕師匠から離れそむいて、他の人と一緒になって念仏すれ

て念佛すれば、往生すべからざるものなりなんどいふこと、不可説なり。 ⑤　如来よりたまはりたる信心をわがものがほにとりかへさんとまふすにや。 ⑥　かへすがえすも、あるべからざることなり。 ⑦　自然のことはりにあひかなはゞ、佛恩をもしり、また師の恩をもしるべきなり。 ⑧　と云ゝ。	ば、往生はできないものだなどと言うことは、言葉に出して言えないほどひどいことである。 ⑤　〔阿弥陀〕如来からいただいた信心を、自分の持ち物であるかのような勝手な様子で、取り戻そうとして言うのであろうか。 ⑥　よくよく考えても、そのようにしてはならないことである。 ⑦　自然という道理に〔自分の信心が〕相い称うならば、み仏の御恩をも知り、また、念仏の道を教えて下さった師匠の御恩をも知るはずなのである。 ⑧　と〔故親鸞聖人は〕仰いました、

はじめに

・「三帰依文」において、仏道を生きる私たちの自覚が「人身受け難し今すでに受く。仏法聞き難し今すでに聞く」と表現されている。第六章は、とくに「仏教聞き難し今已に聞く」という自覚にもとづく縁（真の人間関係）を回復するための仰せとして受けとめたい。

・第六章は「ただ念仏」という教えのもとに実現する人間関係を課題としている。

・第六章は「ただ念仏」の道における利他のあり方についての、世福の中の「奉事師長」を手がかりとした、親鸞聖人の仰せがしるされている。

・第六章は、この人間関係が見失われた具体的な事態として「わが弟子ひとの弟子といふ相論」をあげる。

・第六章は、真の人間関係（仏弟子の共同体）は、如来よりたまわりたる信心によって結ばれる関係であることを示す。

・信仰によって成り立つ真の人間関係がもっとも深いところで象徴するのが師弟関係である。その意味で、第六章の仰せは、単に師弟という関係にとどまらず、実は広く教法における「ともがら」が成り立つ根拠を問い直している。

・第六章は、如来のはたらきのなかに実現する共同体のあり方を教えてくれる[1]。

【第六章①～④の振り返り】

①

・「専修念仏のともがら」においてはじめて「わが弟子人の弟子といふ相論」が問題となる。「専修念仏」の「ともがら」は「御同朋御同行」と表現される関係を実現するはずであるが、

[1] 「無限大悲の如来に信憑するものは、皆共に如来の寵児にして、互に兄弟姉妹なり、故に其関係は、相愛相扶の親情（如来回向の仏心即ち大慈悲心を根本源泉とす）に出づべき也。これ我等の現在に於ける仏心の活動也。然れども尚ほ相対有限の分位にあるが故に絶対無限の相愛相扶は未だ発現する能はざる也。惟大悲回向の分限に於て、互に相愛扶するを得るのみ。而して其相愛相扶の行為は左の二則によるもの也。（求施原則）……」（清沢満之『明治三十六年当用日記』）

そのことが見失われている。また一方で、「序」に「易行の一門に入ること」は「有縁の知識によらずば」とあるように、有縁の知識が決定的な意味をもつために「わが弟子ひとの弟子」という問題も惹起する。

・「専修念仏のともがら」が問題なのではなく、「専修念仏のともがら」であるにもかかわらずという課題である。ここでは「専修念仏のともがら」における人間関係が問われているのである。

・「専修念仏のともがら」の真実のあり方を実現する道を、親鸞聖人は「ただ念仏」の「ともがら」とは「正定聚」でなければならないと受けとめた。そのことを「然るに、煩悩成就の凡夫、生死罪濁の群萌、往相回向の心行を獲れば、即の時に**大乗正定聚**の数に入るなり」（証巻、『聖典』（第 2 版）319－320 頁）と厳密に表現している。

②

・「親鸞は弟子一人ももたず」という言表は、弟子という存在を否定しているのではなく、弟子を私有化することへの批判を裏にもった表明である。

・私たちは、この表明の根に、「親鸞におきてはただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべしとよきひとのおほせをかぶりて信ずるほかに別の子細なきなり……法然聖人にすかされまいらせて念仏して地獄におちたりともさらに後悔すべからずさふろう。……愚身の信心におきてはかくのごし。このうえは……面々の御はからひなり」（第二章）と、親鸞聖人が関東の門弟たちに語った、自身の「よきひとのおほせ」への態度を想起すべきであろう。

また「後述」には「信心一異の相論」の物語が示された直後に、親鸞聖人のつねのおほせとして「弥陀五劫思惟の願をよくよく案ずれば、親鸞一人がためなりけり」という述懐が記されている、ここには「如来よりたまわりたる信心」による独立者の自覚が示されている。

③

・「弥陀の御もよほしにあづかて念佛まふしさふらうひと」……念仏者における「弥陀」という存在（法）との関係を考えてみたい。ここの「弥陀の御もよほし」は、単に「仏の御もよほし」と表現しても、また「如来の御もよほし」と表現しても適切ではないのであろう。「弥陀」という名は、願成就した仏をあらわす。「〔南無阿〕弥陀〔仏〕」は、第十二願、第十三願、第十七願の成就である。その意味で、師とは第十七願の精神を生きる人でなければならない。

④

・「つくべき縁あればともなひ、はなるべき縁あればはなるゝことのある」は、「弥陀の御もよほし」である法の縁に対して、ここは師弟という人の縁についての確かめである。

・人間関係をどこまも「縁」として理解する。ここに自我関心を離れた関係が成り立つ。「ただ念仏」の道における師弟関係（共同体）のあり方は「絆」ではなく、「縁」として受けとめなくてはならない。「縁」だからこそ、その関係を私有化することがない。

・安田は前回述べたように「縁」による関係、もしくは共同体のあり方を、「non-sect」「来る者は拒まず、去る者は追わず」と表現した。そのような態度は、一見、冷たいように見える

が、そこには寸分の執着も許さない透徹したやさしさがあるのではないか。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

⑤　**如来よりたまはりたる信心をわがものがほにとりかへさんとまふすにや。**

　如来からいただいた信心を、自分の持ち物であるかのような勝手な様子で、取り戻そうとして言うのであろうか。

・「如来よりたまはりたる信心」については後述の「故聖人の御ものがたり」(『聖典』(第 2 版）782 頁）を参照[2]。

・「如来よりたまわりたる信心」――この表現こそ『歎異抄』がいう「先師口伝の真信」の核心をなすものである。本願力回向の信である。

・「如来よりたまわりたる信心」の反対は、「自力の心」である。

　自力の心
　　自性唯心に沈み
　　定散自心に迷い

（「信巻」別序、『聖典』（第 2 版）325－236 頁）

・「わがものがほにとりかへさん」の「わがものがほ」は「いかにも自分のものだと見せつけるような様子。わがものづら。」(『岩波古語辞典』) という意である。「とりかへさん」は「信心」を取り返そうとする。

・このように「師をそむきてひとにつれて念佛すれば、往生すべからざるものなりなんどいふ」主張は、「如来よりたまはりたる信心をわがものがほにとりかへさん」することになる。

・他者を支配しようという主張には、信心の私有化が根にある。

---

[2]　「如来よりたまわりたる信心」が「専修念仏のともがら」の根本原理であることをあらわすのが『歎異抄』の後述におかれた信心一異の相論。「如来よりたまわりたる信心」において健康な師弟関係が成り立つ。「わが弟子ひとの弟子といふ相論」は、この「如来よりたまわりたる信心」の「ただひとつなり」という自覚がないために起こってくるであろう。

　右条々〔の異義〕はみなもって信心のことなるよりおこりそうろうか。故聖人（親鸞）の御ものがたりに、法然聖人の御とき、**御弟子**そのかずおおかりけるなかに、おなじく御信心のひとも、すくなくおわしけるにこそ。**親鸞、御同朋の御なかにして、御相論のことそうらいけり**。そのゆえは、「善信が信心も、聖人（法然）の御信心もひとつなり」とおおせのそうらいければ、勢観房、念仏房なんどもうす御同朋達、もってのほかにあらそいたまいて、「いかでか聖人（法然）の御信心に、善信房の信心、ひとつにはあるべきぞ」とそうらいければ、「**聖人（法然）の御智慧才覚ひろくおわしますに、一つならんともうさばこそ、ひがごとならめ。往生の信心においては、まったくことなることなし、ただひとつなり**」と御返答ありけれども、なお、「いかでかその義あらん」という疑難ありければ、詮ずるところ、聖人（法然）の御まえにて、自他の是非をさだむべきにて、この子細をもうしあげければ、法然聖人のおおせには、「**源空が信心も、如来よりたまわりたる信心なり。善信房の信心も如来よりたまわらせたまいたる信心なり。されば、ただひとつなり。別の信心にておわしまさんひとは、源空がまいらんずる浄土へは、よもまいらせたまいそうらわじ**」とおおせそうらいしかば、**当時の一向専修のひとびと**のなかにも、親鸞の御信心にひとつならぬ御こともそうろうらんとおぼえそうろう。

（『歎異抄』後述、『聖典』（第 2 版）783 頁）

・「右条々は、みなもて信心のことなるよりことおこりさふろうか」（後序）とあるように、信心があきらかでないところにさまざまな異義が生れてくる。

・真の師弟という関係は、師の人格に対する信頼や師の説く教義に対する信用ではなく、「如来よりたまはりたる信心」においてのみ成り立つ。

⑥　かへすがえすも、あるべからざることなり。

繰り返し繰り返し〔どう考えても〕、〔そのような態度は〕あってはならないことである。

・「かえすがえすも」は、「繰り返し繰り返し何度考えても」の意。

・「あるべからざる」は、そのような事態は「あってはならない」の意。

・「わが弟子とまふすこと、きはめたる荒凉のことなり」と批判する道理が明示されたので、ここでは「あってはならないこと」とさらに強い表現で批判する。

⑦　自然のことはりにあひかなはゞ、佛恩をもしり、また師の恩をもしるべきなり。

自然という道理に〔自分の信心が〕一致するならば、み仏の御恩をもわかり、また、〔ただ念仏の道を教えて下さった〕師匠の御恩をもわかるはずなのである。

・「自然のことわり」……自然のことはりは自然の道理のこと。自然は理のあり方をあらわす。如来が衆生を摂取する「おのずからしからしむる」法のはたらきのあり方を自然という。

・自然のことわりに相い称わない以上、仏恩も師恩も知ることはできない。なぜならそこには衆生のはからいがあるからである。衆生のはからいによっては自心にとらわれて如来を実体的な対象として向き合うあり方である。

・「あひかなはゞ」……「あひ」は「相い」であり、「かなふ」は、適合する、無理なく合うという意味である。『浄土論註』に「「与仏教相応」は、譬えば函蓋**相称**するが如しと。」（行巻、『聖典』（第２版）185 頁）と、「相称」という表現があることを参照。

・「自然のことはりにあいかなふ」とは、自力のはからいがすたることをいう。

・「如来よりたまはりたる信心」においては信と證とは別ではない。

如来よりたまわりたる信心は、如来のはたらきのなかに自身を見出すことであるので、そこには證の道が含まれている。

・本願力回向の仏道では、如来のはたらき（行）を信知（自覚、感得）して、如来のはたらきの中に生きる（證）のである。自力の立場では、信のあとに行と證が想定されているので「自然」とは言えない。

・三自然

業道自然

無為自然

願力自然

又、言わく。「必ず超絶して去つることを得て、安養国に往生して、横に五悪趣を截り、悪趣**自然に閉じん**。道に昇るに窮極なし。往き易くして人なし。その国逆違せず、**自然の牽く所**なり

（『無量寿経』、『聖典』（第 2 版）61 頁）

「必」は、かならずという。かならずというは、さだまりぬというこころなり。また自然というこころなり。……本願の業因にひかれて、自然にうまるるなり。……「自然」というは、行者のはからいにあらずとなり。

（『尊号真像銘文』、『聖典』（第 2 版）629－630 頁）

「自然のことはりにあひかなはば」については「自然法爾法語[3]」を参照。

・「仏恩」と「師の恩」との関係。

如来大悲の恩徳は　身を粉にしても報ずべし　……「仏恩」
師主知識の恩徳も　骨をくだきても謝すべし　……「師の恩」
（『聖典』（第 2 版）617 頁）

⑧　と云々。

と〔親鸞聖人は〕仰いました。

・この「云々」は、「故親鸞聖人の御物語の趣」を註した「抄」にこのようにあることを示すか。

---

[3] 「自然というは、

自はおのずからという。行者のはからいにあらず、しからしむるということばなり。然というはしからしむということば、行者のはからいにあらず、如来のちかいにてあるがゆえに。法爾というは、この如来のおんちかいなるがゆえに、しからしむるを法爾という。法爾はこのおんちかいなりけるゆえに、すべて行者のはからいのなきをもって、この法のとくのゆえにしからしむというなり。すべて、人のはじめてはからわざるなり。このゆえに、他力には義なきを義とすとしるべしとなり。自然というは、もとよりしからしむるということばなり。

弥陀仏の御ちかいの、もとより行者のはからいにあらずして、南無阿弥陀仏とたのませたまいて、むかえんとはからわせたまいたるによりて、行者のよからんともあしからんともおもわぬを、自然とはもうすぞときき て候う。ちかいのようは、無上仏にならしめんとちかいたまえるなり。無上仏ともうすはかたちもなくまします。**かたちのましまさぬゆえに、自然とはもうすなり。**かたちましますとしめすときには、無上涅槃とはもうさず。かたちもましまさぬようをしらせんとて、はじめて弥陀仏とぞ、ききならいて候う。**みだ仏は、自然のようをしらせんりょう〔料〕なり。この道理をこころえつるのちには、この自然のことはつねにさたすべきにはあらざるなり**。つねに自然をさたせは、義なきを義とすということは、なお義のあるになるべし。これは仏智の不思議にてあるなり。」（「獲得名号自然法爾章」『聖典』（第 2 版）738 頁）

・言葉を通した人間関係のもっとも純粋なものが師弟である。真の師弟の原理がはっきりすれば、その他（親子、兄弟、友人、同行、仇など）の関係の本質もおのずと見えてくる。

・如来のはたらきに目覚めることよって誕生する宗教的人格（仏弟子）のあり方を第六章は教えてくれている。

仏弟子┬「釈迦**諸仏**の弟子」
　　└「金剛心の行人」

・誰もが平等に如来の摂取不捨のはたらきのなかにある（弥陀、如来、仏）という自覚（如来よりたまわりたる信心）において実現する人間関係、そのことを「わが弟子ひとの弟子といふ相論」という具体的な課題を通して明らかにする仰せが第六章である[4]。

・ここで「ただ念仏」という生き方における利他を明かす三つの仰せは終わる。

---

[4] 【参考】「歎異抄における「弟子」は、このようにし「人」として応化してくださった「如来」に出遇ってはじめて、自分を弟子として見だすのである。その人として応化してくださった如来との出遇いが「師」の発見であり、同時に自己を弟子として発見する「弟子」の発見でもある。自己における師の出現と弟子の誕生とは同時なのである。〔…中略…〕歎異抄前序で「幸に有縁の知識に依らずば、いかでか易行の一門に入ることを得んや。」と言われているように、「有縁の知識」すなわち〈阿弥陀仏の応化身としての親鸞聖人〉であったにちがいない。親鸞聖人の頭の中に〈阿弥陀仏の応化身としての法然上人〉があったように、したがって真宗教団はその意味で〈弟子の教団〉である。〈師と弟子〉のいる教団ではなく〈弟子〉しかいない教団である。「有縁の知識」を応化の如来として仰いでいく弟子の系譜である。それが真宗の教団である。〔…中略…〕〈唯円の伝えた親鸞聖人〉の同行という並列的平等的関係構図の系譜は歴史の中にまもなく消えていったのであろうか。／歎異抄第六条の「親鸞は弟子一人ももたずさふらふ。」という一語に表現された信心空間、これが生きた信心の意味空間である。」（西田真因「歎異抄における師弟の問題」『歎異抄論』423－424 頁）

【第Ⅲ期　第四・五・六章のまとめ――「唯称利他」（了祥）についての訓え】

「ただ念仏」はイデオロギーではない。――ただ念仏の仰せが実現する他者関係

利他は、孤立を脱却する道、孤独を解決する道。

「先づ祖訓十章に就て第四以下は起行の訓。是が私の料簡では、四五六が念仏に利他が具するということ。七八九が念仏に自利が円満するといふこと。本願を信じて念仏すれば自利々他円満の無上大利が具するで、外に善をほしがる筈はない、悪をおそれる理はないと、二利円満で大行をいふたもの。第十章が自利々他円満するからは計らはず唯称へるきりぢやと、上を結んだもの也。そこで初九章が三々九となる。初三章が信心、次の三章が利他、後の三章が自利、信心と自利と利他との三々九章なり。唯思い出しあひにならべた十章ではない。よほど心が付けてある。」（了祥『歎異抄聞記』118 頁下。）

		三福
第四章	初、唯称大悲	慈心不殺
第五章	二、却成利他	孝養父母
第六章	三、帰仏利他	奉事師長